

双子を希望する女性たち

— 『ガールズトーク』にみるウガンダ女性の結婚・出産観 —

中澤芽衣*

「あなたはいつ結婚するの？」

村を訪れるたびに、私はこの単純ではあるが、非常に答えづらい質問に困惑してしまう。

2013年9月から、私は首都カンパラから南西に約200km離れた農村に住み込み、フィールドワークを続けている。調査村には、アンコーレやガンダ、コンゴ、チガ、トロ、フンビラ、ルワンダといった民族の人びとがともに暮らしている。2015年9月現在、全66世帯のうち44世帯では夫妻がともに暮らしていた。5世帯が未婚もしくは離婚経験のある男性世帯で、残りの17世帯が配偶者と離婚もしくは死別を経験した女性の世帯であった。女性たちは単身もしくは子どもや孫たちとともに暮らしていた。未婚の女性がひとりで生活することは珍しく、村内ではみかけなかった。ひとり暮らしの未婚女性がすくない理由のひとつとして、女性は結婚するまで両親のもとで暮らすべきだという認識があげられる。アンコーレやガンダの社会では、男性は社会や家庭内において強い権威をもち、家庭内でのお金の使い道などを執り

仕切っている。2000年以降、都市部では高学歴で男性と同等の経済力をもつ女性の社会進出がめざましいとされている一方で、農村社会は依然として男性優位の社会 (male-dominated society) であり、未婚の女性がひとりで暮らすことに否定的な意見をもつ人が多い。

かつて、私はお世話になっている家のお父さんに自分の家を敷地内に建てたいとお願いしたことがある。「未婚の女性が家を建てることには賛成できない。いつか、私が家を建て替えるときにあなた専用の部屋をもうけてあげる」とお父さんは説明し、私のお願いは却下された。ここまで読むと、農村の女性たちが窮屈な日常生活を過ごしているイメージを与えているのかもしれないが、決してそうではない。女性たちは毎日朝早くから農作業に従事し、昼食や夕食の準備、子どもの世話、家の掃除と常に忙しく働いているが、お楽しみの時間がある。それは、日本でいう『ガールズトーク』である。

村内では、女性たちが頼母子講を実施している。頼母子講のことをセービング・マ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ネー (saving money) と呼び、毎週日曜日の夕方には、女性たちはお金をたずさえて、村内の小学校へでかける。お世話になっている家のお母さんがこの頼母子講に参加しているため、私も日曜日の夕方にはお母さんと一緒にでかけるのが日課となっていた。お母さんは昼食を済ませると、早々と水浴びをし、服を着替えたのち、足早に小学校の校庭にむかう。小学校に着くと、すでに5人ほどの女性たちがお喋りしながら待っている。集合時間はとくに決められていないため、ある程度の人数がそろると、記帳役の女性が帳簿を開き、集金をはじめ。字を書ける人が帳簿に記帳する役を担っているため、その女性来ないと、いつまでたっても集金をはじめられない。彼女たちはてきぱきとお金を集め、その日に集めた金額をボールペンで帳簿に記入する。

集金が終わると、この女性たちだけの空間では、ガールズトークがはじまる。私が同席したある日の会話をみてみよう。最初は「調子はどう?」、「家に備蓄しているインゲンマメが底をつく」、「もうすぐ学校がはじまるけど、教育費を支払えない」など、たわいもない世間話をしていく。夫の視線を気にしないですむため、会話はすこしずつヒートアップしていき、「夫は朝からお酒を飲んでばかりで、働かない」や「夫は町にでかけるたびにお金を食べて帰る」と夫に対する愚痴をこぼしはじめた。「お金を食べる (*kulya sente*)」は、ガンダ語で「無駄使いをすること」を意味する。夫に対する愚痴が出つくと、やりとりは最高潮を迎え、彼女たちはウガンダと日本の恋愛について話しはじめた。

私は発話せずに女性たちの輪のなかでおとなしく座っていただけなのに、突然「日本のカップルはどこにでかけるのか」、「デートのときの食事代はどちらが支払うのか」、「どのタイミングで彼氏、彼女の関係になるのか」といった日本の恋愛事情に関する質問攻めにあった。しまいには「高校生や大学生のときに彼氏がいても、妊娠する女性が少ないのはなぜか」という質問をうけ、私は答えに詰まってしまった。ウガンダと日本の恋愛の違いについて話しあっていたのに、気がつけば私の結婚の話題に移っていた。「メイはいつになったら結婚するのか?」、「知り合いにオススメの男性がいるから紹介するよ」と、矢継ぎ早に質問される。「メイ、ここにくる暇があるのなら、まず日本で結婚相手を探なさい」という冗談かどうかわからないことまでいう女性がでてきた。どうやら村の女性たちは、私がいまだに結婚する気配もなく、毎年村に足を運んでいることを気にかけていたようだ。

なぜ、しつこく「いつ結婚するのか」、「はやく結婚しなさい」といわれるのか不思議に思っていたのだが、ウガンダと日本の平均初婚年齢を比較すると謎が解けた。厚生労働省のホームページによると、日本の2014年における平均初婚年齢は、男性が31.1才、女性が29.4才である [厚生労働省 2015]。京都にいと、まだ焦る必要はないと私は思ってしまうのだが、ウガンダの平均初婚年齢をみるとそうはいかない。ウガンダ統計局の報告によると、2011年の平均初婚年齢は男性が22.3才、女性が18.1才である [UBOS



写真1 村で開かれた結婚式

この日、妻となった女性の年齢は18才であった。(2016年9月撮影)

2013]. ウガンダでは、私はすでに結婚をして子どもがいてもおかしくない年齢であり、村の女性たちが焦って私に結婚をすすめる理由を理解できる(写真1).

結婚話の最後には、「将来、何人の子どもを出産する予定なのか」と尋ねられた。結婚する予定のめどがたっていない私にとって、この質問に答えることは難しいが、私は結婚後の自分を想像し、出産状況や子育て、養育費などを考慮して質問に答えた。「きっと出産は2回が限界」と伝えると、女性たちは「子ども2人は少ない」とすかさず反論する。中央情報局の『The World Factbook』において、ウガンダの女性が一生に産む子どもの数、人口特殊出生数は2016年では5.8人で、日本の人口特殊出生数は1.4人である[CIA 2016]. 頼母子講に参加していた女性たちは、みな既婚者である。彼女たちの結婚年齢と出産回数をみてみると、「日本で結婚相手を探しなさい」と私にいったRさんは15才で結婚し、7人の子どもを出産している。記帳役のFさんは19才で結婚し、4度の出産を経験した。

村で1番出産回数の多いJさんは15才で結婚し、9人の子どもを出産した。女性たちは10代後半に結婚し、20代前半までに初産を経験している。ウガンダの人口特殊出生数や村に住む女性たちの出産経験を考えると、「出産は2回が限界」という私の発言に女性たちが物足りなさを感じたのも当然である。

そして、「出産を何回もする体力がないのならば、双子を2回産めば子どもは4人になる」と女性たちは真剣な顔つきで双子を2回出産する案を提示してくる。日本では双子に遭遇する機会はあまり多くはないが、ウガンダでは、日本に比べると双子に遭遇する機会は多い印象をもつ。ガンダ地域では双子には特別な力が秘められていると信じられており、双子を出産したときには、その子どもたちに特定の名前を与える慣習がある。長男はワスワ(Wasswa)、次男はカトー(Kato)、長女はバビリエ(Babirye)、そして次女はナカトー(Nakato)と決まっている。双子を出産した親には大きな名誉が与えられ、その父親はサロンゴ(Salongo)、母親はナロンゴ(Nalongo)と、両親にも新しい名前が授けられる(写真2)。独立時からウガンダを調査している吉田[2012]は、首都カンパラで双子を連れて歩いていると「こんにちは、サロンゴ」、「バナナをあげるよ、ナロンゴ」と知らない人から声をかけられたと記している。

別の日、「この村のことを勉強してくれてありがとう、お疲れさま」と、調査に協力してくれた女性Vさんが畑で収穫したバナナ1房を私にくれた。よくみると、2本のバナナが根元から先まで双子のようにくっつい



写真2 双子を3回出産した女性ナロンゴ
(Nalongo)

4回の出産を経験した彼女は、私と同じ年であった。(2016年9月撮影)

ていた。調査助手は笑みを浮かべながら、私にそのバナナを食べるように促してきた。将来、双子を産めるようにというVさんと調査助手の願いが込められていた。『双子を出産できるように』という願いが込められたバナナを拒否することはできず、将来村の人たちから双子の母ナロンゴと呼ばれることにすこし憧れを抱きながら、私はそのバナナを美味しくいただいた。早くに結婚し、双子に限らず多くの子どもをもうけることを望む彼女たちだからこそ、私が村に帰るたびに口を酸っぱくして結婚や出産について聞いてきたのであった。女性だけの会話に参加することで、すこしずつ村の女性たちの結婚と出産への想いについてわかるようになってきた。

冒頭に述べたように、女性たちは頼母子講のために村内の小学校に集まっていたのだが、集金にかかった時間は30分で、その後、ガールズトークは1時間30分も続いた。女性が喋りだしたら止まらないのは、日本だけでなくウガンダでも同じであった。まるで恋する少女のようにはしゃぎながらガールズ



写真3 日が暮れはじめ、それぞれの帰路につく女性たち

ガールズトークを終えた彼女たちの表情はどことなくスッキリしていた。(2014年7月撮影)

トークに花を咲かせていた彼女たちは、妻であり、また母でもある。彼女たちは子どもたちの水浴びや夕食の準備といったみずからの責務を怠ると、夫から叱責されることもある。日が暮れはじめると、誰かが会話を制止することもなく、女性たちはそれぞれの家路につく(写真3)。こうして、週1回の女性たちのお楽しみは幕を閉じた。

引用文献

- Central Intelligence Agency (CIA). 2016. <<https://www.cia.gov/library/publications/the-world-factbook/fields/2127.html>> (2016年11月21日)
- 厚生労働省. 2015. <<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai14/dl/gaikyou26.pdf>> (2016年10月25日)
- UBOS (Uganda Bureau of Statistics). 2013. <<http://www.ubos.org/onlinefiles/uploads/ubos/gender/Uganda%20Facts%20and%20Figures%20on%20Gender%202013.pdf>> (2016年10月25日)
- 吉田昌夫. 2012. 「ふたごとその名前、儀式」吉田昌夫・白石壮一郎編『ウガンダを知るための53章』明石書店, 186-187.

ネパール山間医療の過去と現在

—村人と生きる，パルパ郡タンセン病院—

中村友香*

タンセンはネパール西部パルパ郡の郡庁所在地で，首都カトマンズより300キロ，車で約8時間のところにある。15世紀以降パルパ・セーナ王国の都として栄えたタンセンは山の上の，人口約3万人〔National Population and Housing Census 2011〕の町である。山の斜面に敷かれた石畳の細い道路は迷路のように伸び，名産ダカ織の店などたくさん種類の店が並ぶ。そんな町の外れの丘に建っているのがUnited Mission Hospital Tansen（以下タンセン病院）である。町外れといえど，そこは寂しい場所ではない。病院の東には遙か遠くまでいくつもの山々が連なり美しく，町に面した西と南側には，病院に来院患者や家族がくつろぐ軽食屋，遠方の患者や付き添いの村人たちが宿泊するホテル，薬局，生活雑貨や駄菓子を売る露店が立ち並び賑わっている。私は，この病院でかつて医師として働いた故岩村昇医師の夫人である史子氏，養子であるネパール人女性のマヤ氏らと共にタンセンの町を訪れた。

タンセン病院設立

タンセン病院は1959年，医療奉仕と伝道を目的としてネパール合同ミッション（The

United Mission to Nepal¹⁾）によって開設され，パルパ郡及びその周辺地域に近代医療を紹介，普及した。当時ネパール人のキリスト教改宗は違法とされる状況下での設立であった。²⁾ 院長はアメリカ人医師Dr. フレデリックで，そのほかにイギリス人医師，そして1962年には岩村昇氏が加わった。1960年代初期，病院従事者は28名，ベッド数は46床，外来患者は1日約300人であった。当時，レントゲン撮影や開腹手術が可能で，入院設備のある近代総合病院は中西部ネパール山間地帯に住む人口200万人に対してタンセン病院のみであった。1960年代，近代医療サービスへアクセス可能であったのは人口960万人のうち7%程度であったといわれるネパールにおいて，タンセン病院は大きな役割を担うこととなった。多くの患者は5～6日，中には20日の道のりを歩いて，もしくは親族や村人に担がれてこの病院へやって来たという。

結核と戦う岩村医師

日本キリスト教海外医療協力会から送り出された岩村昇医師は公衆衛生医としてタンセン病院に着任した。当時，タンセン病院の外

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

来内科患者では、結核やハンセン病、マラリアやコレラ、細菌性赤痢やアメーバ赤痢が多く、入院患者の80%近くが感染症患者であった。こうした中で岩村氏が精力的に取り組んだことのひとつは村落での結核検診であった。岩村氏は外来の結核患者のほとんどが咯血してからやってくる様子を見て、患者が病院に来るのを待っていては手遅れであると考えた。そして、赴任初期には小型のレントゲン機器を背負って村々を行き来し、日本式の結核対策を導入した。1966年ごろから在宅治療中心の簡易的で安価な結核対策を、そして1968年以降、村の伝統的な民間治療師の活動に協力する形で患者を見つけ治療を試みる現地方式の対策を立てようとした。

タンセンの昔と今

母親を結核で亡くし、自らも結核乳児であったマヤ氏と岩村夫妻が親子になって、50年以上の月日がたった。史子氏とマヤ氏は「当時は本当に、丘の上にぽつんと病院がある感じで、周りには何もなかったの。町の方には立派な庁舎があったけれど、病院の近くには建物もなくて、裏の丘は植林もされていなくて、はげ山だったわ。じゃがいもの大きさは相変わらず小さいままでけれど、町はとて大きくなった」と当時の町の様子を口々に振り返る。1960年代、首都カトマンズよりタンセンへ行きつくのは容易ではなく、不定期な国内線を運よく乗り継ぐことができたとしても、そのあと車で3、4時間、そし



写真1 人々がかつて歩いて越えた山々



写真2 現在のタンセンの町

て1日の徒歩によって行きつくことのできる、山の中の村であった。不定期便を捕まえられなければ、地方都市ポカラから125キロ、約5日間の徒歩の旅である。米は高級品でトウモロコシやヒエが主食、病院の明かりが、西ネパール山間地域唯一の電気であった。現在では、冒頭にも述べたように、カトマンズや地方都市ポカラからタンセンまで車道がある。病院の前には病院の発展とともに広がったバザールがある。3Gの携帯電話や

1) 医療奉仕を目的に、十数カ国のキリスト教団体が合同して作られた。
2) 宣教団の入国、活動は1951年より認められていた。

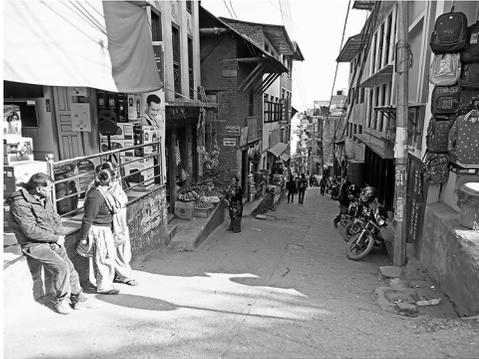


写真 3 さまざまな店が立ち並ぶ



写真 4 病院外観

インターネットが使える。外国人観光客も訪れるようになり、朝食にトーストとバター、マンゴージュースが出る大規模なホテルができた。夜になれば家々の明かりがまぶしく、昼間よりもかえって多くの人が住んでいることを実感させるのである。

変わり続けるタンセン病院

かつて岩村氏が結核と戦ったタンセン周辺の様子は大きく変わっても、タンセン病院は近隣地域から頼りにされる大規模病院である。パルパ郡のみならず、80キロ以上離れたインド国境付近からも1日計300人近くの患者が訪れる。中西部ネパール僻地の村人たちの多くは今でも「近くで治らない病気になったらまずタンセンに行く」と言う。岩村氏が働いた当時のように、今でもタンセン病院は、貧困や地理的な要因によって病院へのアクセスが困難な、ネパール山間地域の膨大な人口の健康を支えている。それに加えてタンセン病院は、近年増加するニーズに寄りそう方法も模索し続けている。2012年より院



写真 5 病院待合室

内に設立された糖尿病クリニックはそのひとつである。ネパールにおける医療施設や医療保健プロジェクトは多くの海外援助団体に支えられているが、しばしば感染症対策や栄養改善、母子保健等が急務とされ、非感染性疾病対策は、新しすぎる問題、あるいはネパールがまだ到達していない問題として扱われることさえある。しかしながら、2015年の調査によるとネパールの糖尿病罹患率は人口の約8%、糖尿病関連死は死因の3%を占めている。かつて岩村氏が予防対策に奔走した結核による死も2012年の統計では死因の3%

となっている。両者を単純に比較することはできないが、糖尿病がネパールにおいても増加していると考えても論理の飛躍ではないだろう。タンセン病院でも1日の外来患者約300人のうち約2~3人が2型糖尿病と診断されるという。タンセン病院はこうした状況に対応し、糖尿病のための食事改善や定期的な血液検査、視力検査などの管理や教育を専門とする医療従事者を院内に置くようになった。

「糖尿病が悪化しても、ネパールの村に住む人々が人口透析や移植を受けるのは容易なことではありません。特に貧困層にとってそうした治療を継続して行なうのは非常に高額で、手続きも煩雑です。首都まで行って大きな病院で透析を受けるというのも時には必要なことですが、できるだけ近くの病院で、病気を管理し改善していけるのはとても大切なことです。」タンセン病院で働くネパール人医師は言う。

村人と生きる、とはなんなのか

タンセン病院は、新しい疾病と捉えられる2型糖尿病の患者や、一方で山間僻地に取り残された無医村地帯の村人たちなど、多様なネパールの医療状況に対し、患者たちにとってできるだけ無理のない良い医療を提供しようとしてきた。岩村氏は、無償で何日も知り合いでもない患者を背負い山道を歩く理由を、日当のためではなく「サンガイジウナコラギ(共に生きるためだ)」と答えたネパール人青年の言葉をスローガンに、村人たちの知恵を学ぶことを喜び、日本式の活動ではなく村人と共に活動を行なう道を模索してきた。



写真6 院内教会

ネパールの医療保健の発展は、こうした岩村氏やタンセン病院をはじめ、キリスト教の信仰と伝道の下での医療奉仕に支えられてきた。しかし一方でこうした活動を受け入れるネパール社会に葛藤がないわけではない。私が、キリスト教団体が支援する公衆衛生活動に同行していた時のことだ。ネパール人キリスト教徒のスタッフが突然怒鳴り声をあげた。「ヒンドゥー教徒はいつまでも貧しく病気だろう。なぜ神を信じない。祈らないからあなたは治らない。」見ると怒鳴られた女性はおびえ涙ぐんでいる。村人たちに訳を聞くと、女性は体調不良が治らず村の民間治療師のところへ行ったこと、そうした行動がキリスト教系支援団体の中で良く思われていないことを教えてくれた。そして、キリスト教系支援団体には大変感謝しているが、貧しい村で大量の資金を使って、ネパール人キリスト教徒を「作ろうとしている」のではないかと意見を交わし始めた。厚い信仰心の下で、異

教徒のためにも祈り、働くキリスト教徒医療従事者たちに私は出会ってきた。しかしながら、しばしば彼らの信仰に関する熱心な口調や医療効果と結び付けた語り口に、戸惑いや反感、不安をもつヒンドゥー教徒たちがいるのも確かである。

こうしたことが頭をよぎるために、タンセン病院や岩村昇氏の活動を、伝道として行なわれた素晴らしい医療奉仕であるとして考えることに躊躇してしまう。この小さなエピソードからみても、医療援助と伝道は、医療的貢献という視点からのみでは語れない、複雑な状況をネパールにもたらしているようにみえるからだ。しかしそれでも、上記に述べてきたように、タンセン病院と岩村氏が目指した「サンガイジウネ（共に生きる）」術は、ネパールに関わる者、また援助や伝道の分野

で活動する多くの者にとってひとつの道しるべとなってきただろう。

タンセン病院でキリスト教徒たちの祈りに耳を傾けながら、なんとなく居心地の悪い思いをする。それは私自身が、他の神を信じる者たちと共にどのように生きるべきかという問いの答えをまだ知らないからかもしれない。それでも、タンセンで考えたことを胸に、人はどのように共に生きられるのか、自分自身の答えを探すことを辞めないでいたいと思うのであった。

引用文献

National Population and Housing Census. 2011. (Village Development Committee/Municipality) Volume02. (http://cbs.gov.np/image/data/Population/VDC-Municipality%20in%20detail/VDC_Municipality.pdf)

海は道、空は地図

中野真備*

「漂海民」バジョーマレーシア・サバ州や、インドネシア島嶼部を中心に拡散居住し、国籍にとらわれず、独自の言語を操り、ときにオーストラリアや中国まで海を渡った、極めて移動性の高い人びとーの多くは現在、海城世界の社会・政治・経済的変化を受け、かつ

ては家船にのって海上生活をしていたが、陸地あるいは海上に杭上集落を建てるなど、定住化が進んでいる。私が訪れた、インドネシア共和国中部スラウェシ州バンガイ諸島県バンガイ島・ペレン島および北マルク州タリアブ島県タリアブ島・リンボ島は、こうした

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 リンボ島バジヨ集落の杭上家屋

「漂海民」バジヨが多く住む地域であり、バジヨの人口分布上はバンガイ群に分類される [長津 2012].

調査の拠点としている南スラウエシ州のマカッサルから中部スラウエシ州のルウツまで飛行機で1時間、空港から車で1時間かけて港へ行き、2時間ほど船に乗ると、バンガイ諸島の入り口・ベレン島サラカンへ着く。さらに離島へ行くには、そこから車で1時間ほどのところにあるトピン港から1~2時間ほどの船に乗る必要がある。北マルクのタリアブ島までは、さらに8~9時間ほど夜行船に乗ることになる。

海から読み取るちから

ただ海と空を眺めて、ときに9時間近くを過ごす船旅は、退屈どころか、あちこちから情報が飛びこんでくる。海の色はたえず変わり、波は複雑な模様をつくりだす。すこし先の海が、くっきり線引きしたかのように青からエメラルドへ変われば、そこから先はプランクトンが多いのかもしれないし、サンゴ礁のある浅瀬なのかもしれない。大きな島

が見えていたら、それは大陸棚かもしれない。暗い青、深い青、エメラルド、深い緑など、海の色は鏡のように、その底に広がるものを映し出す。波の模様は、風の影響によるものばかりではない。リンボ島のあるバジヨの熟年漁師は、「すべての山の形には特徴がある。その山が、その形の浜をつくり、その浜が、その形の波をつくる」と話す。だから、その波で現在地がわかるのだという。浜へ波が寄せては打ちかえり、また波をつくる。その波のはね返りを読むというのだから、驚きである。まるでイルカの超音波ではないか、と私は思った。さらには、權を海に刺し、耳をあてて波の音を聞けば、海の深さがわかるという。まさかそんなことが、と思うが、実際に彼らはそうして漁場を見つけ、安全に漁をおこなってきたのだ。

星のこと、漁のこと

空もまた、情報であふれている。特に、船の甲板で見る満天の星空は、まぶしくて目がチカチカした。夕方から明け方にかけて漁をする人びとにとって、星はただの風景ではない。たとえば日本では、金星をイカボシとよぶ地域が多くある [内田 1973]。イカは夜行性のため、イカ漁は一般的に夜間におこなわれることが多い。その漁の時刻の目安として利用されていたのが金星だったのである。以前、新潟県佐渡島の明治35年生まれ of イカ釣り漁師の手記をみる機会があった。そこには、頭の中にプラネタリウムがあるのではないかというほど、事細かに星の位置や出現時刻が記されていた。さらに、星と月と潮、そ

してイカ漁との関係が詳細に記されていた。2014年に新潟県佐渡島のイカ釣り漁撈についてフィールドワークをおこなった際は、すでに漁船や漁法の機械化が進み、それぞれの星の名前を覚えている漁師は少なかった。しかし、ホシノデ（星が地平線から空へとあがってくること）・ホシノイリ（星が地平線に沈むこと）やツキノデ・ツキノイリがイカの釣れるタイミングに関係しているのだということまでは、今でも彼らは知っている。

天体の動きを把握し、利用していたのは、バジョも同様である。バンガイ諸島やタリアブ島・リンボ島のバジョ集落で、漁に行く人びとをみていると、木彫りの船に1人か2人が乗り込み、モーター以外は何も機械を積みこんでいなかった。聞けば、クンダリやマナド、トギアン諸島などの遠方へ行くときも、コンパスやGPS、魚群探知機は積まないという。それでは、私がどこを走っているのか皆目見当もつかなかった、あの9時間近い船旅よりもはるかに長い距離を、肉眼と経験だけを頼りに海を渡っていくということになる。たとえばペレン島のバジョは「クンダリに行くときはラヤンラヤン（凧）を目指して進む」という。ラヤンラヤンというのはおそらく南十字星のことで、小さいが明るく、見つけやすい星座である。ペレン島からはちょうど南に位置するクンダリへ行くには、確かによい目印である。こうした目印の星や星座はいくつもあるようだった。やや頼りない、小さな木彫りの船で大海原へ漕ぎ出すと、私は、突然知らない土地に置き去りにされたような気持ちになる。自分はどの方角

からきたのか、どうやって帰ればいいのか、機械がなければ何もわからない。夜の海などもってのほかだ。そう感じていたのは、どうやら私だけのようだった。おそらく彼らは夜の海でも、手元ではなく頭上を仰ぎ、まっすぐと進むのだろう。手元に何もなくても、頭の上には地図があるのだ。昼ならば山の影形や海の色などを見ることができるし、夜には月や星がある。知らなければただの風景でしかないが、彼らにとっては地図なのである。

1~2人のみの小規模な漁では、船が小さく簡素なこともあり、海流や潮汐に左右されやすい。サーフィンが日々の海の状態に左右されることと同様である。海流の荒れるときに小船で漕ぎ出せば、転覆してもおかしくない。特に、バンガイ諸島およびタリアブ島・リンボ島のある海域は、小さな島が散らばっていることもあり、複雑な季節風が吹き荒れ、それがまた複雑で荒れやすい海流をつくりだしている。リンボ島からタリアブ島への小船での移動は実にスリリングだった。海の色の違いが見える、魚の群れが目の前にいる、とはしゃいでいたのはほんの数分で、何



写真2 ひとりで漁に出かけるバジョ漁師

度も文字どおり頭から水をかぶることとなった。進行方向とは逆に座り、防水バッグを腹に抱え、ヘリをしっかりとつかみ、水しぶきの合間になんとか目を開けられるようになると、ようやく海の様子を見ることができた。テーマパークのアトラクションのように無茶苦茶に進んでいるように感じた船だが、向かってくる波には正面から乗り、進行方向を変えるときは波模様の合間を進んでいるようだった。小船には船首に1人が座り、船尾のモーターのところに1人が立っており、ときおり前の1人が「3時の方角だ！」と声をあげると、後ろの1人がそれに合わせて船を動かしていた。そしてどうやらそれは、前方の島を迂回するためというよりは、かなり前方にある島の周囲で変わっている波の模様を見て、それを迂回しているようであった。漁をしている小船や、スピードボートとしばしばすれ違いますが、どうやらその船を操るのはほぼ全員バジヨのようである。そういえば、宿の女主人も、「あの辺は海流が荒れているからなかなか行けないよ」と言っていた。あるのは船室付きの大型船のみである。それ以外は、彼らのように海をよく知ったものでないと、この複雑な海流を進むことができないのか、と納得した。彼らにとって海はいつも歩く道のようなもので、そこにはその歩きかたがあるのだ。そんな彼らも、よく知っているからこそ、いつでも漁ができるわけではないようだ。リンボ島のバジヨは「満月・新月・下弦の月のときは海流が強くなるから、半月のときに漁にでなければならぬ」という。彼らにとっての天体は、地図だ

けではなく漁のカレンダーの役目も果たしているのだ。

海は道、空は地図

タリアブ島からルウッへ帰る夜行船で、甲板に寝ころびながら私はぼんやりと彼らの話を思い出していた。照明などないのに、夜空一面に散らばる星々で、甲板は明るかった。はじめに金星が、そして段々と他の星々も見えはじめ、気づけば満天の星空が広がっていた。天の川など、口を開けた白く大きな蛇のようで、これを「ビントン・ナガ（竜の星）」とよんでいたバジヨの話を思い出した。星座を見つけるとき、ひとときわ明るい星を手がかりにして探すものだと思っていたが、ここではそれができなかった。あまりにもたくさん星が、どれも明るくはっきりと輝いているのである。彼らが読めたこの地図は、私には情報が多すぎて、細かすぎて、読み取れなかった。私が今まで知っていると思っていたものは、数本の線といくつかの建物しか描かれていない案内図のようなものだったらしい。往路で知り合いになった乗組員と、「あれがビマ サクティ（天の川）」「今のはビントン ジャトゥ（流れ星）」などと話していると、周りにわらわらと人が寄ってくる。口をぽかんと開けて上を見ていた私は、相当奇妙だったらしい。自由で気性が荒く、粗暴だといわれる船乗りたちは、しかしとても親切で、フランクである。つたない言葉で、星や海のことや、取りとめのないようなことを話しているうちに、いつの間にか何時間も経っていたようである。「ようである」というの

は、携帯の電源を切っていたので、正確にはわからないためである。ただ、握りこぶしをつくった腕を水平に伸ばし、そこからまたこぶしを目当ての星まで重ねていくと、こぶし6つ分ほど増えていた。ということは、どうやら4時間ちょっとは経っていたらしい。空中で握りこぶしを重ねて大真面目な顔をする日本人の女は、やはり奇妙だったかもしれないが、「空図」をすこし読めたような気がして、私はひとり、小さな満足感にひたって

いた。海は道で、空は地図である。佐渡のイカ釣り漁師や、バジヨの漁師のあの深い目は、この風景からどれほど多くのことを読み取るのだろうか。そんなことを考えながら、船上での夜は更けていった。

引用文献

- 長津一史. 2012. 『海民』の生成過程 インドネシア・スラウェシ周辺海域のサマ人を事例として 『白山人類学』15: 45-71.
内田武志. 1973. 『星の方言と民俗』岩崎美術社.

声を上げる活動家たち

鶴田星子*

2016年8月、3年ぶりにインド西部・プネーに降り立った。大音量のクラクションと排ガスの臭さは相変わらずだ。しかしそのようなことを思っていたのも束の間、街中に入ると見知らぬ建物が増えてくる。今回訪れたプネーは、ムンバイーに次ぐマハーラーシュトラ州第二の都市で、文教都市としても名をはせている。

「おかえり！」旧市街地にある友人の家に到着すると、久々の再訪を家族が暖かく出迎えてくれた。この家族とはかれこれ7年来の仲である。「あれー！いつこっちに来たの！！」と隣近所に住む親戚たちも私に会い

に来てくれ、この日の晩は、会えなかった3年間の出来事を語り合った。

今回インドを訪れた目的は、このマハーラーシュトラ州における、ヒन्दゥーとムスリムの関係について調べることだった。同州はインドでも宗教暴動発生件数の多い州であり、州都のムンバイーでは2006年7月、そして2008年11月に死者100名を超す大規模なテロも発生している。そのような状況の中で、ヒन्दゥーとムスリムが互いを憎むことなく、両者の融和が実現するよう活動している団体を調査することが私の目的であった。

プネー到着の翌日、私は調査に関する指導

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

を受けるためプネー大学に足を運び、そこでひとりの学生を紹介されることとなった。紹介してくれた先生によると、彼は歴史学科の院生で、ヒンドゥーとムスリムの対立の歴史について研究しているのだという。彼なら必ず私の調査を助けてくれるだろうから、ぜひ会ってみたらいい、とのことだった。私はインド入りしてからプネーに来るまでの2週間、今回の調査に関して何も手がかりをつかめず行き詰っていた。そのため、デオクマールという名のこの学生に会うことにより、私はこの後大いに助けられることとなる。

彼と会えたのはその1週間後のことだった。彼は時間をしっかり守る生真面目なインド人で、日本人である私がインドの宗教対立に興味をもっていることを不思議そうに、しかし嬉しそうに話を聞いてくれた。そして彼は私の調査がうまく進んでいないことを察知し、「週末にボランティア団体やNGO団体の関係者が集まるイベントがあるけど一緒に行く？」と誘ってくれたのだ。私は藁にもすがる思いで詳細も聞かぬまま、連れて行ってもらえるよう即座にお願いした。

数日後、イベント会場に着くとそこには大勢の人々が集っており、ヒンドゥー・ナショナリズムを批判した書籍販売や、著名な活動家による講演などが行なわれていた(写真1)。私はこんなにも盛大なイベントに誘われていたにもかかわらず、誰とどのような話をすれ



写真1 屋内ホールでの講演会の様子

ばいいのか分からず右往左往するばかり。そんな私をデオクマールは、「インド各地(主にマハーラーシュトラ州)から活動家が集まってきているから、コネクションを作るいい機会になるよ」と励まし、親切にも数人の活動家を紹介してくれ、後日彼らのオフィスに訪問できるよう取り計らってくれた。彼が見ず知らずの外国人の私にここまでしてくれることに、感謝の言葉しかでてこなかった。

このイベントは、2013年8月20日にヒンドゥー・ナショナリストによって殺害された、著名な合理主義者(rationalist)であるナレンドラ・ダボールカル氏¹⁾の追悼式典であった(写真2)。これは、毎年彼の命日に合わせて催されているのだそうだ。式典の大きさが、亡くなってもなお彼の影響力が強いことを示していた。また式典の後には旧市街地の中心部に移動して、彼の死に対する学生のデモが実行された(写真3)。

ところでただの院生だと思っていたデオクマールがなぜこのような活動の存在を知って

1) Maharashtra Andhashraddha Nirmoolan Samiti (MANS, マハーラーシュトラ州における迷信を撲滅する委員会)を設立。彼の死後1週間で、The Maharashtra Prevention and Eradication of Human Sacrifice and Other Inhuman, Evil and Aghori Practices and Black Magic Act, 2013 (マハーラーシュトラ州における生贄、悪とアゴリーの儀礼、黒魔術の禁止・撲滅法 2013) が制定された。



写真2 ナレンドラ・ダボールカル氏



写真3 学生によるデモ活動

いたのだろうか、これにはわけがあった。実は彼自身、学生運動の団体に所属する活動家だったのだ。彼は、自分はアンベードカリスト²⁾であると言い、ダリトの出自をもつ新仏教徒であるとのことだった。「プネー大学の学生ってこういう活動に熱心だったんだね、全然知らなかった！」と言うと彼は誇らしそうに笑っていた。不遇な現状を嘆くより、それを変えるために自ら声を上げ、活動しなければならない。そうやって實際行動に

うつしている若者が予想外に多かったことに、私は感銘を受けた。

「明日以降僕は一緒に行動できないから、ひとりでもうまくやるんだよ。今日連絡先を聞いた人全員にアポをとるんだよ！」と、不安そうにしていた私を、彼は最後まで叱咤激励してくれた。またそのように日々奮闘している彼の姿は私に勇気を与えてくれ、彼に恩を返すつもりで、その日会った数人に早速アポをとった。

追悼式典への参加から数日後、デオクマールが紹介してくれた活動家のひとりである、シャムスッディン・タンボリ氏が教鞭を執っている大学を訪れた。彼はその後さまざまな活動に私を同伴させてくれ、私の調査を力強くサポートしてくれた。彼はプネー大学付属カレッジで英語学の教授という肩書を持ちながら、Muslim Satyashodhak Mandal (MSM, 真理を探究するムスリムの会) という団体の代表を務める人物である。この団体は1970年にハミッド・ダルワイ氏によって設立され、現在は、異宗教間結婚への支援活動を中心に、宗教間の融和を説く講演会やイベントなどを頻繁に開催している(写真4)。先日の追悼式典では、友人であるという警察署の人々と一緒にいたためか、はたまた恰幅のよい体格のせいも、いかにも威厳に満ちており近寄りがたかったのだが、実際には非常に親しみやすい人柄であった。

「私はムスリムだけだね、信じているのは

2) マハール・カースト(ダリト、不可触民カーストのひとつ)出身でインド初代法務大臣になったB.R. アンベードカル博士の名前に由来。彼はカースト制度を痛烈に批判し、反バラモン運動を展開し、マハーラーシュトラ州ナーグプルにてヒन्दゥー・ダリトの仏教徒(新仏教徒)への集団改宗を実行した。



写真4 MSM主催の講演会

ヒューマニティーだよ。つまり私はヒューマニストだ。」「ヒンドゥーもムスリムも、1割はとても善良な人たちでもう1割はとても邪な考えをもつ人たち。残りの8割の“普通の人たち”が悪い方に流されないよう、私たちは活動しなければならぬんだよ。」

学食で一緒にチャイを飲みながら、彼はこのように言った。彼自身ムスリムでありながらこのような活動をしているために、同じムスリムからも敵対視されている、とも語っていたが、彼の目には強い決意が満ち溢れていた。

今回出会えた活動家のほとんどが、デオク

マールのような新仏教徒やタンボリ氏のようなムスリムであった。そして彼らの多くが自らを特定の宗教にとらわれない、アンベードカリストやヒューマニストと名乗り、ヒンドゥー至上主義に抵抗するという共通の目的のため、宗教の違いを超え協力し合っていた。しかし一方で、多くの一般市民はヒンドゥーの伝統・文化に基づいて生活している。実際に、長年お世話になってきた先述のヒンドゥーの家族に聞いても、「ムスリムの友人もいないし、ムスリムのことってよくわからないな。そういう人がいるんだね」という反応だった。市井の人々と、声を上げる活動家との意識の差は大きい。タンボリ氏の言うように、このような「8割の“普通の人たち”」にどのように宗教間融和に関心をもってもらえることができるか。活動の浸透には時間を要するが、それが今後の大きな課題なのではないだろうか。

暴動の記憶

宮園琢也*

インドでの調査

2016年8月2日から9月20日にかけて、ニューデリー、ウッタール・プラデーシュ州ム

ザッファルナガル、シャームリーにてフィールドワーク調査を行なった。インドでは宗教対立から生じる暴動が頻発している。その際

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

にマスメディアはどのような役割を果たすのか。現代のインドにおけるマスメディアの状況と、2013年にムザッファルナガルで起こった暴動に関するインタビュー調査を行なうためインドへと渡航した。

2013年8月から9月にかけてムザッファルナガルでは暴動が発生した。その死者数は52人に上り、十万人以上のムスリムが居住地を追われたという。ムザッファルナガル暴動の発端として、あるヒन्दゥー教徒の少女をからかったムスリムに対し、その少女の兄弟が報復として殺害したことや、ムスリムとヒन्दゥー教徒同士のバイク事故が契機となった等の諸々の理由が挙げられている。暴動の始点は不明瞭であるが、イスラーム教とヒन्दゥー教の両信徒の間に緊張関係が生まれ、結果として暴力的な対立に発展したのである。

ムザッファルナガルを訪れる前に、ニューデリーにおいて事前に情報を集めた。彼らは口々に、見るものはない、危険だからやめた方がいいと私に言った。実際にムザッファルナガルは犯罪率が高く、新聞に目を通すと女性に対する暴行や、バイク強盗の記事を度々目にすることがある。私は不安を抱えたままムザッファルナガルへと向かった。

ムザッファルナガル

ニューデリー発の列車に揺られて約3時間半、予定の所要時間を1時間以上も過ぎて、列車はムザッファルナガル駅に到着した。あたりはすでに薄暗く、人々の足取りもどこか家路を急いでいるようにみえた。ムザッファルナガルを訪れたのは8月13日



写真1 ニューデリー駅構内

で、ちょうどインド独立記念日の2日前であった。ムザッファルナガルに向けて出発する日の前日、ニューデリーの中心部であるコンノートプレイスでは、インド国旗や、国旗の配色をモチーフにした飾りつけ、各店舗のセールや広告などで街が彩られ、着々と記念日に向けた準備が進められていた。その一方で、記念日2日前のムザッファルナガルではニューデリーで見たような、記念日に向けた準備がされているようにはみえず、その雰囲気の違いに驚いた。ところが、いよいよ8月15日を迎えると、記念日を祝うパレードが催された。学生だと思われる人々が、太鼓を打ち鳴らしながら行進の列をつくり町を練り歩き、道路を埋め尽くした。道端でその列を眺めていた私が、彼らにカメラを向けると、こぶしを振り上げ手に持った国旗をパタパタと振ってこたえてくれた。その活況は、初め



写真2 独立記念日の行進

てムザッファルナガル駅に降り立った時に感じた薄暗さ、停滞感を拭い去ってくれるようであり、太鼓や鳴り物を鳴らしながら賑々しく歩くさまは、ニューデリーの人が口を酸っぱくして私に幾度も説いたような忠告や説得とはまるで正反対であった。その土地で、3年前に凄惨な暴動が起こったとは思えなかった。しかし、数日をムザッファルナガルで過ごすうちに気づいたことがある。それは、その暴動の傷跡がいまだに残っているということである。

ムザッファルナガル再訪

その傷跡の存在は、2度目のムザッファルナガルでの調査の際にはっきりと感じられたのであった。

ムザッファルナガルを2度目に訪れた際は、ヒンディー語通訳者として、ジャワハールラー・ネルー大学 (JNU) の学生2名に同行してもらった。この訪問では、ムザッファルナガルに加えシャームリーの調査を予定していた。シャームリーでは2013年の暴動によ

り居住地を追われた人々が、政府の用意した避難民キャンプに暮らしている。調査期間は5日間で、ムザッファルナガルにて4日間にわたり新聞各社にインタビュー調査を行ない、その後シャームリーに移動して避難民にインタビュー調査をするというものであった。

ムザッファルナガルで行なったインタビュー調査では、現地の新聞社に勤めている編集者に、記事の編集方針について話を聞くことができた。「新聞を作り始めた頃は、中立な立場で記事を出していた。しかし他の新聞社との競合の中で、読者を煽るセンセーショナルな記事を掲載することを重要視するようになった。」つまり、ジャーナリストとしての中立的な立場から、現在では新聞社の生き残りのために注目度の高い記事を優先して新聞に載せているという。

インタビューの帰途、ある洋服店の前に人だかりができていた。その中心にはバイクにまたがる一組の男女がおり、女性の方はヴェールで顔を覆っている。少し様子をうかがっているうちに、その店の店主ともめている模様であることが分かった。店主は声を荒げながらその男女に詰め寄り、周囲の人はそれをなだめている。次第に、取り囲む人の中からバイクに乗ったふたりに手を出し始めるものが出てきた。男性は慌ててバイクのエンジンをかけ、クラクションを鳴らしながらその場を半ば強引に立ち去っていった。なぜ彼らが口論していたのかは分からない。なぜふたりを取り囲んでいたのかも分からない。好奇心からか、それとも擁護するためか、はたまた何かしらの悪意をもっていたのか。傍

から観察していた私に分かることは、バイクにまたがる男性とヴェールを被った女性に対し人々が詰め寄っていた、というただその事実のみである。ふと衆人の注目の的となっている彼らから視線を外し、私の同行者や成り行きを見守る人々の顔に目をやると、彼らの顔に浮かんだ緊張の徴をはっきりと認めることができた。このような出来事を、さっきまで私がインタビューをしていた記者や編集者はどのように記事を書き報じるのかと思うと、脳裏に不安がよぎったことは忘れられない。

次に、陸路で4時間かけてシャームリーへと向かう。そこで行なった避難民へのインタビュー調査ではメディアに対する彼らの不信感を感じ取ることができた。「あいつらはマネーイーティングメディアだ。金をもらえばウソでも何でも書く」と、イスラームの宗教学校であるマドラサで避難生活を送るムスリムは言っていた。彼の言葉、身振りからはメディアに対する不信感、怒りがにじみ出ている。

ムザッファルナガルでの出来事や、怒気をはらんだ避難民の応答は、いまだに残る暴動の傷跡のように私には思われる。それはいつか癒えるのだろうか。それとも度重なる暴力によって、その傷跡はえぐり続けられるのだろうか。

独立記念日に街を包み込んだ活況と、いまだ漂う緊張感がそこには存在していた。暴動が発生し収束してから3年がたつが、ムザッファルナガルやその周辺で起こる事件は絶えず今でも新聞で報道されている。2017年はウッター・プラデーシュ州で州議会選挙が行なわれる年にあたり、激しい政治的競合に

よってこれらの状況がどのように変容していくのか、その動向に注視する必要があるだろう。

マスメディアの現況

英領期インドの独立運動は大衆と、彼らを牽引する指導者との相互作用の中、大きなねりとなって独立という形に結実した。その際に活躍したのがマスメディアである。独立運動期においてはイギリス植民地政府から反政府的な言説が弾圧されたが、独立運動の火を灯し、かつ燃やし続けたのは知識人の言論空間であった新聞でありラジオであった。新聞は英字新聞に加え各地方言語によるものが発行され、ラジオに関しては1920年代初頭に、アマチュアの人々により試験的に放送された。それは、後のインド放送会社 (Indian Broadcasting Company) の設立への弾みとなった。それらのマスメディアのもつ影響力は計り知れず、世論を活性化させ、生活の質の向上に資するという面もあれば、利益を引き込む手段として使われ、プロパガンダへと向かっていくという面も兼ね備えている。例として、独立運動の精神的支柱となったマハートマ・ガンディーは、南アフリカにおけるインド人への差別反対運動において週刊紙により自身の主張を唱えたことや、対してインド放送会社は植民地政府の管理下に置かれ、そのプロパガンダ機関になってしまったことが挙げられる。

2016年夏インド、携帯電話やインターネットの爆発的な普及のおかげで、ニューデリーではスマートフォン片手におしゃべりに興ずる人々がいたところにいる。一方で、



写真3 赤信号待ちの車やりキシャーの運転手に新聞を売り歩く女性

ひとつの新聞を数人で回し読みする習慣もニューデリーには残っている。このように、マスメディアの状況は、ひとつが現れればひとつが消えるのではなく、さまざまな在り方で存在し、影響力を及ぼし続けているのである。新聞やテレビ、SNSの発する玉石混交の情報の中で人々は日々生きている。その情報の濁流の中で、流れに身を任せるのか。そ

れとも、流れに逆らいながら自らの歩みを決めるのか。いずれにせよ、彼ら自身の在り方を決めるのは彼ら自身なのである。

インドについて考える際、必ず宗教対立というものがつきまとう。それは近年になって姿を現わしたのではなく、連綿と続く歴史の中で少しずつ形成されてきたものである。その中で新しく要素として加わったものは、その流れを取り囲む環境、つまり現代のマスメディアが生み出す環境なのだ。そして、宗教対立が暴力の形をとり現れた宗教暴動という流れに、マスメディアは大きく飲み込まれてしまう。2002年のグジャラートで起こった暴動の際には、偽の情報を報じ、復讐心を掻き立てる報道を行なった地元新聞を当時の州首相であったナレーンドラ・モーディー（現在のインド中央政府首相）が称賛した。マスメディアと宗教暴動の関係は、現在のマスメディアの多様性、多量性の観点からみてもインドを考える際に重要な部分を成しているだろう。

‘Moderate’ Fatness is Desirable: Beliefs Related to Body Size in Mukono, Central Uganda

Seera GEORGINA *

A male acquaintance introduced me to his wife, who does not work outside their home;

additionally, they have no space to dig a garden. They live in a rented room with their

* Graduate School of Asian and African Area Studies, Inter-Graduate School Program for Sustainable Development and Survivable Societies, Kyoto University

three children. They live in village N and had moved here a few weeks earlier from village K. Both are Bakiga people from southwestern Uganda, and moved to central Uganda to find work.

This is a common situation in Mukono, since it is only about 21 km from the centre of Kampala, the capital city. Mukono is very urbanized and its population includes many people who have moved here to find work. As it takes time to save enough money to buy land and build their own houses, people often live in rented one- or two-room houses. Consequently, they have only enough space to live and nowhere to carry out agriculture. Mobility is high and people readily move from place to place to change jobs, find less expensive accommodation, or because they do not get along with their neighbours.

After introducing myself, and the nature of my research, my acquaintance's wife agreed to introduce me to her neighbours in village N and to her friends in village K (Photo 1). I hoped to use this opportunity as a starting point to find more women in the area who would be willing to participate in my study. I started off by measuring her height and body composition and then those of her neighbours and friends.

Her immediate neighbour was a primary school teacher who had also moved to Mukono only recently. She weighed 59.3 kg, but believed that she was too small, although

her BMI¹⁾ classified her as normal. She attributed this to the fact that she was growing old. She was 41 years old when I met her and wanted to weigh about 79 kg.

From other interviews, I found that a weight of 50-60 kg was considered too low for a mature person based on comments such as: “*I have ever weighed 50 kg even when I am an adult*” and “*How can Alifons, a big man, weigh only 50 kg?*”

This teacher was not the only person who felt that her recent weight change was due to natural reasons beyond her control.

Another neighbour, Ms. MJ, spoke about how she gained weight continuously during her last pregnancy although she had no appetite and barely ate anything: “*I did not*



Photo 1. Typical living quarters in Mukono; rented rooms built side by side

eat much during that pregnancy, but I gained weight rapidly and I felt weak. The nurses even advised me to stop eating so much. That is why people sometimes disagree with nurses because they always say you are fat because you eat too much, but it's not always the case."

Although she was obese based on her BMI, she reported that she had recently lost weight. In December, she weighed 84 kg despite the fact that she was gardening and doing a lot of work. Recently, she has been sitting at home and not doing much work, but has still lost weight. She said she had been using family planning (by injection) until October and thought that this might have caused the weight gain.

As another woman who was also overweight said, *"We get fat these days because of contraception and family planning."*

Ms. MJ's husband was a 'boda boda'²⁾ driver (Photo 2), and was relatively fat.

It was not uncommon to find that when a woman had a partner who was fat, she was also fat or at least desired to be. For example Maama³⁾ Mwe, who had a normal BMI, felt that she was too small because: *"My husband is fat, so people wonder why I am small."* This could be because fatness is equated to

maturity.

In the words of one woman, *"Don't you see that I look like a child, yet I am a mother of five?"*

Another woman who wanted to be fatter because her husband was fat stated: *"We don't eat and do the same things. I stay here and dig, while he goes to the big boss."*

A fat couple would also be considered affluent and so a spouse who was smaller than her husband could cause a lot of confusion and discussion in the village. In the words of one older woman who had tried and failed to gain weight, *"People think that fat people have money so when you are small people look down on you."*

In addition, a woman considered herself beautiful when she had a more substantial



Photo 2. A 'boda boda' driver waiting for customers in village K; this is a common occupation for men in Mukono

1) The international classification of body size using the Body Mass Index (BMI) classifies individuals as underweight (<18.5 kg/m²), normal (18.5-24.99 kg/m²), overweight (25-29.99 kg/m²), or obese (≥30 kg/m²) based on the formula BMI=weight (kg)/height (m²).

2) Motor cycles used as a means of public transportation.

3) In Uganda, Maama is the local term for mother and it precedes her child's name. This form of address is used more commonly than the woman's own name.

body, as reflected in the words of Ms. AF: “*Before having children, I was fat. I was a beautiful woman. I had a size although I was not very big.*” Her comment clearly shows the idea held by many women that it was desirable to be a bit fat, but not too fat.

One of the major reasons why excessive fatness was not desirable was because it reduced the ability to work. In the words of Maama J, “*I do not want to be so fat that if someone asked me to stand up and do something, I couldn’t do it.*”

Ms. MJ described both of her parents as small, but said that her sisters are even fatter than she is. She said all of the girls in her family had been small as children and only her brother was big but now, as adults, her brother is small while the girls are big. This has already been described as a manifestation of the double burden of malnutrition across the life course of an individual or group of individuals in the same family, in which people who were underweight as children become overweight as adults and vice versa.

Ms. MJ worked in a salon from about 9 am until 10 pm. She walked to work in the morning but came home on a boda boda at night. Many other women who were found to be fat were involved in similar casual labour. For instance, Maama ER, who was also obese, went to the town centre every day to work on a tailoring machine.

From village N, we travelled to village K,

where Ms. AF had originally lived. Village K is close to a university campus, so it has many hostels and other student-related businesses.

We visited a woman at her kiosk, which is located next to a student hostel (Photo 3). She has a neighbour who runs a restaurant selling whole foods during the day and fast foods in the evening. Another neighbour sells fried snacks, such as samosas, in the morning for people to eat with their tea or porridge for breakfast. When I told her about my research, she was very enthusiastic and explained that she would be willing to commit to my research over an extended period, especially if I could help her to reduce her size!

Although she had the highest BMI among all of the women I had measured to that point, it was still surprising to hear that she wanted to lose weight because there were several other women in the village who



Photo 3. Maama J, an obese woman who feels that she is too fat

wanted to become bigger or were comfortable with their weight.

She explained that she does not wake up at a specific time and sometimes fails to go to work when she does not feel motivated. Recently, however, her husband had lost his job, so she now has no choice, and has to work. This reminded me of Maama J's comment about being too fat and being less mobile and less able to work.

She described a typical day as follows: *“When I arrive at work, I open the kiosk, clean up, and sit down. This takes me about 10 minutes because I do it slowly—sometimes I even use my legs! I ask someone to fetch me water. At home, I watch TV; here I miss my TV. Some nights, like last night, I stay up until midnight watching TV. I watch the news and then the soaps immediately after the news.”*

She spent more than 2 hours a day watching television, which has already been shown to be a key factor in the prevalence of obesity.

“Mother is big; father is big; and my brothers all gained weight when they finished school. My children are smaller.”

This might suggest that obesity was inherited in her family. However, it also points to the double burden of malnutrition between her and her children, *i.e.*, when fat parents have thin children.

The first time that I saw her, she weighed 102.4 kg and her BMI was 40 kg/m². The

next time we weighed her, she said, *“I hope I have lost some weight, but I think I have gained weight because I have been eating a lot of pork.”* She was right; that day, she weighed 104 kg. Pork and other food items are associated with increases in body size and rightly so.

Some outstanding features in this case are that others recognize her as ‘too fat’ and she is aware that she is too big and wants to lose weight. She believes that the biggest contributors to her weight gain were marriage, pregnancy, and lactation. She might also have a genetic disposition to being overweight. She spends nearly her entire day seated and at least 2 hours a day watching TV. She feels that she is too heavy to do daily chores, such as mopping her house.

Another woman, Maama B, is a 25-year-old woman living in the same village. She weighed 62.1 kg and her BMI was 27.8 kg/m². Based on her BMI, she was overweight although she felt that her weight was just right. She attended primary school for 5 years. Her husband is a boda boda driver. She rents a single room and lives with her three children and a relative's child. She recently obtained a short contract to cook food for builders at a nearby construction site. They do not own a television set or a radio.

“My current body size is good. When I was young, about the size that my children are now, I was extremely small. I grew a bit fat



Photo 4. Left: Maama B, an overweight woman who feels that her size is just right. Right: Maama A, a normal weight woman who feels that she is too small.

when I was a girl, but I really got fat during my marriage. Now I have grown thin” —she said.

Maama A, on the right in Photo 4, is also 25 years old. She weighed 60.1 kg and her BMI was 23.5 kg/m², which is normal,

although she feels that she is too small. She completed primary school and attended 2 years of secondary school. Her husband is also a boda boda driver. They rent a double room that costs about 20USD a month, including electricity. She has three children: a girl and two younger boys.

“I would like to really gain a lot of weight because I feel that I am too small when I conceive and deliver; I lose a lot of weight while I am lactating” —she said.

For a long time, severe thinness as a result of hunger has been the symbol of malnutrition in Africa. In Uganda, however, fatness is also emerging as a problem despite the prevailing under-nutrition. In this study, the subjects considered obesity as excessive fatness and being overweight was more desirable than having a normal weight due to beliefs attributing being overweight to a good quality of life. In addition, the changes in body size were understood as being involuntary. Many of the overweight women seem to be victims of the double burden of malnutrition over the course of their lives.

広西壮族自治区のトン族集落における居住空間

—風水と「政策移動」—

黄 潔*

「風水」との出会い

2012年1月、私は山道を小型のバスに揺られながら、初めて広西壮族自治区三江侗族自治県のトン族の集落に入った。先に杉林や水田が目に入り、そして綺麗な屋根付きの橋（「風雨橋」と呼ばれる）を渡って、寨門（村の出入りする通路）を経て、やっと地元の人々が居住する集落G村に着いた。彼らの集落は、川が流れる山間の平地に位置し、各父系出自集団はそれぞれ鼓楼（塔形の集会所）を中心に集まって居住することにより形成された。彼らは自身が鼓楼に集う様子を、魚の群が魚穴に集まるのに見立てているのだという。



写真1 トン族の集落空間（広西壮族自治区三江侗族自治県林溪郷G村）
2016年8月24日撮影

しかも、私がとても驚いたのは、トン族の集落において風水が不可欠なものであったことである。集落の周辺（特に集落より下流側）には、屋根付きの橋が数多く架けられている。こうした橋の位置は風水に則って選ばれている。なぜなら、川に沿って流れ去る財（宝、気）をせきとめ、集落内に残す役割をもつとされるからである。橋の撤去についても常に風水がその根拠とされている。

たとえば、G村のはずれに建つ丁哨橋が1963年に撤去・移動された原因に関して、中国共産党が主導する政治運動によって強行されたという事実について記憶する村民は少ない。しかし、ほとんどの村民がこの本当の原因が、当地の風水と関係があると信じており、とりわけ火災の発生と関係があるのではないかと思っている。よく聞く話としては、

「昔、こんな話を聞いたことがある。我々の土地は風水を重んじ、村の西北から見ると、地形は川獺のようである。川獺は魚が好物だ。村は四方を山に囲まれており、山の下に丁哨橋を造った後、川獺を閉じ込めたように見え、風水を破壊したのだ。これによって村の風紀は乱れ、村内にこそどろや、強盗・

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

盗賊・博徒が増え、狡猾なものは外へ行って強盗をし、それ以外の者は村で物を盗み、田んぼを売って家は貧しくなってしまった。その後1961年に火事が起こって、村の8割が焼けてしまった。被災者のうちには、橋を撤収すべきだと言う者もいた。」

つまり、彼らにとって橋の立地は火災と関係づけられるだけでなく、彼らの生存環境を脅かすものとして、さらに人の行いなどにも影響するものであった。そのため、橋の撤去と移動が必要であった。これは集落にて新たに創造され、広く流布する風水伝説であり、その発生・伝播・意味について興味を覚え、現在まで研究を続けてきた。私は2016年8月から10月までの間、「政策移動」(近現代中国における政府主導の政策による、村落空間の強制的な移転などを指す)に関して、トン族集落の風水の実践および地元民の考えに注目してフィールドワークを行なった。

三江県のトン族の集落をめぐる「政策移動」

現代中国では特に1950年代から、中国共産党が主導した農村や農業に関連する政策や、文化的政策(特に大躍進・農業学大寨・四清運動・文化大革命)を背景として、少数民族の村落の自然環境と社会環境が大きく変化した。たとえば、大躍進政策により、食糧の増産のために山地が開墾され水利施設が建設された。また、鉄鋼生産を支援するために農村部で多量の樹木が伐採され都市部へ供出させられた。現在では、文化遺産保護や観光開発などの政策によって、道路や水利施設な

どを集落の別の場所に移動したり、区画整理の対象となることも多い。また、2000年以降には、西部地域の大開発政策により、西南中国の少数民族地区は、貧困問題解決のための重点地区として、行政主導で経済や文化政策(たとえば農田水利・観光開発・防火防災・遺産保護など)が実行されている。これらによって、村落の移転と住民の移住ならびに公共空間の区画整理などの環境変動が頻繁に発生することとなった。

三江県においては、1950年以降、集落空間をめぐる「政策移動」が非常に多いとみられる。具体的にいえば、1963-1966年「四清運動」(中国共産党の指導下で行なわれた総点検運動)、およびその後続いた文化大革命では、集落内部の風雨橋と神廟などの公共空間や施設が破壊され、一族の象徴としての鼓楼が村の生産隊(中国農村部において、国家の計画に基づき土地の共有により農業生産を行なう、社会主義的農業経済の村民組織)の倉庫や会議場に改造された。

1964年には、「農業学大寨」(農業の発展は山西省大寨村に学べという意味)と呼ばれる社会運動があったため、林溪郷のG村などの集落周辺の山(墓地や古い樹がある)に百畝の耕田を開き、杉の木を伐採して柳州市の国营木材加工工場に売却し、また観光のために大量の竹を植えてきた。

1974年、林溪郷の政策によって、トン族の諸集落には防火線を設置し、家屋と家屋の間隔を広げるために、一部の民家を周辺の山の裾に移動させた。

2008年、三江県の民族村寨改造プロジェ

クト（家屋・電気・竈・水道・厠の改善）が始まり、村民は防火のために、山頂に貯水池を造り、家屋や鼓楼の火塘（囲炉裏）をコンクリート製へと改めた。

現在、G村は、2012年にほかの7つのトン族集落（広西省1；湖南省6）と共に世界遺産の予備リストに登録され、また2013年広西壮族自治区環境保護庁により生態村建設工事が始まり、集落に対して新たな管理条例が実施されている。

この60年来、政策移動が原因で、トン族の集落における自然や社会空間には、たびたび変動が起こった。

集落における風水に関する語り

風水は、中国西南部に居住するトン族のもつ文化や日常生活の中で非常に重要な知識とみなされてきた。風水の良し悪しが原因で県城（県庁所在地）が移転されたことが、歴史書や碑文に記載されている。風水に関する伝承は各地の集落で語り伝えられている。トン族の集落には現在でも風水の専門家（風水師）がおり、村人の家屋や公共建築物を建築する時（陽宅風水）や人が亡くなった時（陰宅風水）には風水師をよび、方位や日時を選択を行ったり、儀礼を執行したりしている。しかしながら、中国における開発政策においては、龍脈（風水において重要な山並み）や墓地の開墾、樹木（風水樹）の伐採が強行され、風水は「封建迷信」として強く攻撃されてきた。

特に、近年集落空間の移動に関して、政策のために強制されたという事実より、村民は

空間の移動によって起こった災いが、当地の風水と関係があると信じている。

三江県のトン族の集落で行なった聞き取り調査によって、政策移動の背景にある村落の風水伝説は4つに分類することができる。

1) 四清・文革の時、川下流側に位置した風雨橋の撤去については、風水が理由とされている言説。前述した丁哨橋のように、建てた橋の位置や方位が、集落の風水を破壊したため、村に悪い影響を与え、さらに火事などの災いが起こったという。

2) 集団農業を提唱する時、一族の鼓楼の破壊や改造は、風水上の理由から、一村や一族の発展に悪い影響を及ぼすとする言説。たとえば、村落にあった五層の楊姓鼓楼が一層に改造された後、族員の中に強盗や泥棒が現れ、家業は廃れたという。

3) 「農業学大寨」の時、山を掘ったり、墓地を開墾したりしたことにまつわる伝説。特に龍脈を掘った後、人が病死したり、家運が傾いたことがあったという。

4) 樹木（風水樹）の伐採や、神廟など公共空間を破壊した個人（特に政治運動の時、中国共産党や政府の幹部、資産家）がその報いを受けるといった伝説。1970年代、国家政策による木材販売のための伐採に関して、古樹を切りつけた後、伐採を担当した責任者たちは、病死したり、認知症となったのみならず、さらに全村にも災いがもたらされたという。

これらの語りは集落で流布しており、トン族の人々は歴史的事件に主観的な風水に関する想像を付加して説明しようとしており、こ

れらが新たに創造された風水伝説であると考えられる。

集落にみる現代の風水実践

政策要因による集落空間の移動や改造が発生する際、住民は村落の風水を守るため、自発的に対処してきた。それは、伝統的に、村全体で民間の慣習法によって、自然環境をめぐる禁忌が設定されていることによる。たとえば、風水樹を切ったら、罰金を科す。また、政府との交渉に際して、多くの場合、住民が中国政府の幹部たちの目につかないようにして、密かに独自の対処を行なうことがある。

以下は調査地三江県林溪郷 G 村の事例である。

1) 1974 年、防火防災のため、郷政府の要求に応じて、G 村は防火線を設け、山頂に 2 つの貯水池を建設した。しかし、村民は井戸水を飲む習慣があり、風水を考慮して、龍井（大火災が発生した後に龍井を造るのはトン族の伝統である）を造ることが必要であると考えた。そのため、貯水池の建造工事が終わった後、村民は密かに集落の地理先生（風水の専門家）を頼んで、山の東方に 2 つの龍井を設けた。

2) 2016 年下半期、貧困扶助や観光開発のため、G 村は林溪郷から数万元の交付金を受領したことから、駐車場を建設している。その駐車場は、集落から 15 メートルほどの距離にある。工事は郷政府の計画によるものだが、G 村の老人たちはその駐車場から集落の中心までの道の建設を大変重要視してい



写真 2 老人たちが道の方位を確定している
2016 年 9 月 2 日撮影

た。G 村の老人たちにとって、その具体的な施設は問題ではなく、道を建設するには、まず地理先生に頼んで、みてもらう必要があり、外から集落への道の方位が、村全体の繁栄や人の発展に影響を与えるという風水上の意味があったためである。そのために、彼らは工事中に、密かに地理先生に頼んで、道の方位を確定してもらった。またそれを「村民に対して便利である」という客観的理由として、政府に説明した。

今後は風水師による民間儀礼に関する文献（手書き本）の分析に注力したい。それをもとに、風水伝説の発生と伝播、およびその実践に関する、住民自身による歴史、宗教、文化の再構築の営為について研究していきたい。

謝 辞

この研究は、平成 28 年度旅の文化研究所「第 23 回公募研究プロジェクト」の助成金交付により研究を遂行することができました。この場をかりて御礼申し上げます。